

「月刊日本」（令和元年 11 月号「読者より」欄に掲載

国難対応策「拝謁記」が示唆？（老生の呟き）

日本郷友連盟 特別顧問 宝珠山 昇

米国の相対的な力、国際警察活動意欲の低下、中国の台頭、露国の復活行動、イスラム勢力等の覚醒等により、隣国や諸国の「自国第一主義」、「国際法無視行動」等が顕在化・噴出し、加えて、電磁波利用技術の発達、地球・宇宙の環境破壊の進行、人類の長寿化等による難題が現出し、いま、先進諸国も大きな国難・艱難に直面していると理解し、不安を感じながら過ごしている老生です。

日本は、こんな厳しい生存環境の中でどう生き抜いて行くのか、これに対応できる有効な備えはどのようなものか、それらをどう整えて行くのでしょうか。

条約を破り、話し合いを拒否し、力で現状変更を迫った例は歴史に数多あるでしょう。大量無差別殺傷破壊兵器の拡散防止体制は、既に破綻しているか少なくともその運命にあるでしょう。戦後史は、これまでの国連中心主義、国際協調主義、恒久平和の実現等を唱えるだけでは有効に対応できないことを証明しているでしょう。明治維新から約 150 年、昭和維新から約 75 年、これらに続く令和維新を断行しなければならない時代に入っているのでしょうか。

「月刊日本」10 月号の「羅針盤」で森田実氏が主張されている「東洋の和の文明を世界に広げることによって恒久平和を実現」するには日本は具体的にどのような行動を採ればよいのでしょうか。

また、「巻頭言」で南岳主幹が期待されている「互に欺かず争わず、真実を以て交わり候を誠信とは申し候」といった「外交の要諦」を、約束を反故にし反日教育も推進する諸国に通用させ、友好・協力関係等を構築して行ける人材・指導者群をどうすれば育成できるのでしょうか。

さらには、「読者欄」で、戸塚亮一氏が主張されている「勝てば官軍、敗れば賊軍」の壁を乗り越える「敗者としての反撃や対策についての戦略」はどのようなものなのでしょうか。

これらは、これまでの国連中心、国際協調、国際法遵守主義、国際人育成教育、等とどう違うのでしょうか、憲法改正、非核三原則の見直し、自衛権行使態勢の充実策、等どう考えているのでしょうか、等の疑問を次々に沸かせます。提示されている目標・目的に異存等全くありませんが、具体的な有効かつ実行可能な方法論が見えず不安が消えません。

こんな国難の時代、現下の諸政治家等の自己・国内中心に見える言動、諸論者の論評等に不安を覚えながら、老生にもできることが何かないと自問し、鞭を打ちつ

つ過ごしています。

そんな中、初代宮内庁長官を務めた田島道治氏の、次のような「昭和天皇拝謁記」に際会し、これは令和維新の基本的な主課題を示唆しているのではないかと感じ嬉しく喜んで拝読しています。

「27年当時、昭和天皇は度々、日本の再軍備や憲法改正に言及。憲法については「他の改正は一切ふれずに軍備の点だけ公明正大に堂々と改正してやった方がいい」（27年2月11日）、再軍備に関しても「侵略者のない世の中になれば武備は入らぬが侵略者が人間社会にある以上軍隊は不得已（やむをえず）必要だ」（同3月11日）などと述べていた。」

これらに啓発されてか、先の参議院議員選挙後の自由民主党等の憲法改正への取り組み姿勢が柔軟に強化されているように見え、勇気づけられています。憲法改正案が国民投票に付される日の早からんことを期待しています。

（令和元年9月23日記）